

【研究メモ】

## 研究活動と研究論文

——修士論文を中心に——\*

岡 部 光 明

### 【要約】

論文の書き方を解説した書物は極めて多い。そのうち、卒業論文あるいは博士論文に焦点を絞ったものは相当見かけるが、その中間に位置する修士論文に焦点をあてたものはほとんど見当たらない。そこで本稿では、修士課程の学生が修士論文を作成する場合を取り上げた。ここでは、良い修士論文を作成し、それを上手に残すための要点を数多くの具体例をもって提示するとともに、筆者のこれまでの指導経験に基づく実践的アドバイスを5つにまとめた。それらは(1) 基幹用語を適切に定義せよ、(2) 先行研究を批判的に検討するための独立した章を立てよ、(3) 読まれるのは概要 (abstract) だけであると心得よ、(4) 最終提出論文は別途自費で黒表紙製本して保存せよ、(5) 論文のさわり部分を公刊せよ、である。

### はじめに

大学教育においては、学部、大学院それぞれのレベルに応じて学修カリキュラムが構築されているが、学生がその成果を挙げたことを確認する一つの重要な制度が論文(卒業論文、修士論文、博士論文)とその完成である。それは評価の尺度として機能するだけでなく、それへの取り組みを通じてそれぞれの課程に要請される力量を習得させる教育の手段でもある。学生が各レベルの最終段階において執筆する論文は、このように二つの機能を持つ。

学生は、こうした大きな挑戦課題に取り組むため、研究の仕方のほか、論文の書き方についても各種の手引きを参照することが多いのは当然である。その場合、参照できる論文一般の書き方についての書物はおびただしく刊行されており、なかでも卒業論文や博士論文を直接のテーマとして書かれた書物は少なくない。しかし、両者の中間に位置する修士論文に絞ってその手引きをしたものは極めて少ない<sup>(1)</sup>。修士論文は、いうまでもなく

修士課程2年間の学修の総まとめである。また修士論文は、その後プロフェッショナルあるいは研究者いずれの道をたどるにしてもその学生にとって人生の一里塚である。

そこで本稿では、修士課程の学生が修士論文を執筆する場合に焦点を定め、国際標準に合致した良い修士論文を書くための実践的なヒントを筆者のこれまでの指導経験<sup>(2)</sup>を踏まえつつ取りまとめることにする。むろん、卒業論文、修士論文、博士論文の全てに共通する要点は数多いが、それらのうち特に良い修士論文を作成し、それを上手に残すうえで重要な点を具体例とともに提示する。

以下第1節では、大学院修士課程のユニークさを簡単に解説する。第2節では、良い修士論文に仕上げ、それを将来のために上手に残すうえで特に重要なことを5つのアドバイスとして提示する。第3節は結論である。

### 1. 大学院修士課程のユニークさ

大学は教育と研究を行うことを基本的な任務としているが、そこには明確に異なる3つのレベル

がある（岡部 2011a : 24-25 ページ）。

すなわち、学部教育では、一つあるいは幾つかの学問領域の基礎知識を理解させるとともに、知的スキルの基礎を身につけることが基本的役割とされる。これに対して大学院の場合、修士課程では、広い視野と深い学識つまり人間社会を特定の視点から深く切り込んで理解する力量を身につけることが基本的な要請になる。この力量は、修士課程修了後に専門性を要する高度の能力を身につけた職業人（プロフェッショナル）になる場合でも、研究者になる場合でも、共通するものである。そして博士課程の場合には、学生がまず人類が持つ知識のフロンティアに到達し、次いでそれを前に押し広げる能力を磨き完成させること、つまり自立した研究者として先端性や独創性を持った学術的な探求を自分で行っていく能力を身につけさせることにある。

これら3つのレベルの目標を達成するために、大学はそれぞれのレベルに関して学修カリキュラムを構築し、その履修を学生に要請している。これら各レベルのいわば総まとめに該当するものが、それぞれ卒業論文、修士論文、博士論文ということができる。そしてそれらは、学生の履修目標到達度合いを評価する手段であるだけでなく、学生にそれぞれの課程の目標を到達させるための教育手段という意味も持つ。このため、これら各段階で良い論文を書くように指導することは、教育をより有効なものにすることを意味する。その一助にすることが本稿の執筆動機である。

本稿では、学部の卒業論文と大学院の博士論文の中間に位置する修士論文を中心に考える。修士論文は、各側面で明らかに他の2つの中間的な性格を持つ。

このため以下では、卒業論文の場合に強調されるようなことから（例えば、出典明示の必要性、パラグラフの意味とその構成方法、事実と意見の峻別の必要性など）は取り上げない。これらについては、すでに論じたところであり<sup>(3)</sup>、また他の書物<sup>(4)</sup>を参照されたい。一方、博士論文の場合に重視されることがら（例えば、独創的な分析枠組み提示の必要性など）や研究の取り組み姿勢、あ

るいは研究の具体的進め方なども別途述べた<sup>(5)</sup>ので本稿の対象外とする。ここでは、あくまで修士論文を作成する場合に限定し、それに関するアドバイスを以下のべることにする。

## 2. 5つの実践的アドバイス

以下では、学生が修士論文を執筆する場合、とくに重要な実践的アドバイスを5つ提示したい。それらの多くは卒業論文あるいは博士論文の場合にも当てはまる面が少なくないが、とりわけ修士論文を作成する場合に（つまり修士課程の学生にとって）留意すべき点である。これらの諸点は、例えば修士論文の中間発表会などで多くの教員がそろって指摘する一般的な問題点に対する対応を示したものである。したがって、それらに留意して修士論文を作成すれば、そうでない場合よりも格段に良い論文となり、また学生の将来にとっても大きな利点もたらされる、と筆者は考えている。

### (1) 基幹用語を適切に定義せよ

5つのアドバイスのうち第一番目、それは「基幹用語を適切に定義せよ」である（図表1）。基幹用語（当該論文におけるキーワード）を論文中で明示的に定義していない、あるいは基幹用語の定義が適切でない、というのが非常に多くの修士論文において見かける問題点である。

例えば、修士論文の中間発表会においては、この問題があると指摘される論文が非常に多い。修士課程2年生のケースにおいてすら、依然としてそうした指摘がみられるのは情けないことである。適切な定義が欠如していると指摘された論文では、たいていの場合、論点が錯綜したり、混乱したり、あるいは論文の構造が論理的でなかったりするなど、論文としての正確さ（accuracy）、明快さ（clarity）に問題があるケースが多い。

したがって「キーワードを適切に定義せよ」ということが第1番目のアドバイスとなる。キーワードを適切に定義すれば、論点、論文構造が自ずと明確化する面が大きい。「定義する」とは、ここで

### ポイント1. 基幹用語を適切に定義せよ

- 基幹用語の「適切な」定義が欠如しているため、論点が錯綜したり混乱するなど、論文としての正確さ (accuracy)、明快さ (clarity) に問題があるケースが非常に多い。
- 適切に定義せよ。そうすれば論点と論文構造が明確化する。
- 「適切に」定義 (define) する方法は幾つかある。

図表 1

### (1) 独立した文章によって定義する方法

- 例 1a  
介護とは、病人などを介抱し世話をすること。 [新辞林]
- 例 1b  
介護とは、心身の機能が低下して自立した生活を送れなくなった高齢者や障害者に対して、自宅や施設において、食事・入浴・排せつなどの世話をすること。  
[慶應義塾大学総合政策学部2010年度入試問題から]
- 良い定義: 概念がより具体的に説明されており、研究対象や研究方法が明確になる。Operational な定義である。

図表 2

は辞書的な意味で用語の説明文を加えるというよりも、むしろ「適切に定義する (operationally defined)」という意味 (Roberts 2010 : 139 ページ) で用いたい。単に「定義する」のではなく「適切に」定義することが重要である、と指摘しておきたい。つまり、当該論文にとって重要な用語を用いる場合には、以下に例示するとおり、どのような意味で用いるかを明確かつ具体的に述べておくことが求められる。用語を定義するには、いくつかの方法がある。

#### 独立した文章による定義

第1は、独立した文章によって定義する方法である。つまり「何々とは……である。」あるいは「何々とは、本論文で……という意味で使うことにする。」などと記述することである。これは一番標準的かつ分かりやすい定義の仕方である。

例えば、現代日本社会で重要性が増している「介護」の定義を考えよう (図表 2)。介護という言葉辞書 (新辞林) で見ると、介護とは「病人などを介抱し世話をすること」とある。「介護とは……すること」。確かに、この定義は介護について一応の説明を与えており、間違っていない。辞書は簡潔を旨とするので、こういう定義の仕方をする。しかし、介護をテーマとする研究論文における定義としては、この規定では不十分である。では、どう定義したらよいのか。

その一つの良い解答例がある。それは、慶應義塾大学総合政策学部の 2010 年度入試問題の設問

の中に出ていた文章である。そこでは「介護とは、心身の機能が低下して、自立した生活を送れなくなった高齢者、障害者に対して、自宅や施設において食事、入浴、排泄などの世話をすること」と定義されている。「介護とは……すること」という標準的文章による定義である。これは、良くできた定義といえる。なぜなら、介護に関する色々な側面が具体的に取り上げられ、それら全体として介護とはどのようなことなのか的確に表現されているからである。

すなわち「心身の機能が低下していること」が一つの側面とされている。このため、介護問題を追求する場合には心身のどのような機能の低下かを具体的に考える道が開けてくる。また介護の対象は「自立した生活を送れなくなった高齢者や障害者」であると規定されており、これらは分かりやすい一方、深く追求しようとするれば「自立した生活を送れなくなった」とはどのような状況なのかを詳細に規定することを可能にしている。また、そうした状況にある者すべてではなく、介護の対象者を高齢者や障害者に限定していることは、問題を具体的に取り上げることを容易にしている。さらに介護する場所は「自宅や施設において」であり、世話をする領域は「食事、入浴、排泄など」と規定しているので、それらを中心に考察して行けばよいことになる。

この定義では、対象者、対象者の状況、対象とする活動領域、実施場所などを明確にしている点の特徴であり、そのため介護のイメージが非常に

具体的になっている。そして特に重要なのは、研究テーマが介護である場合、このような各種の側面を順次検討して行くことができるので、この定義は研究に使えるものとなっている。

つまり、良い定義とは、概念ができるだけ具体的に説明されているものであり、そのため研究対象や研究方法が明確になっているもの、といえる。換言すれば「適切な定義」とは「オペレーショナルな定義 (operationally defined)」であり、研究論文においてはそうなるように定義するのが有用であり、かつ大切である。論文のキーワードは、辞書的な定義を与えるのではなく「オペレーショナルな定義を与えよ」ということになる。

ここで、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の教員や学生の多くが非常に頻繁に使い、かつ重要な研究対象になっている二つの用語を取り上げておきたい(図表3)。その第1は「ガバナンス」である。SFCでこの言葉を使っている人は、果たして各自これを明確に定義しているだろうか。もしそうでなければ、各自がぜひ適切に定義して欲しい。SFCを卒業した人、あるいは修士課程を修了した人が「ガバナンスとはなんですか」と聞かれた場合、「さあ」というのでは寂しい。

「ガバナンスとは、一般的に言えば何らかの権限あるいは合意によってひとつの秩序ないしシステム稼働なしくみが作り出されている状態のことである」と筆者は定義している(岡部 2001)。この定義は、言われてみれば格別目新しくないかもしれないが、今から約10年前の在外研究時、英国

オックスフォード大学に滞在していたときに関連する書物を20~30冊読んだ上で私なりに突き詰めた表現である。この定義がベストだというつもりはないが、大学院生および教員は、各自の研究に即して色々な定義の仕方があると考えている。

もう一つは「共有資源」ないし「コモンズ」と称される概念についてである。筆者の定義はこのようなものである:「共有資源(通称コモンズ)とは、川、湖、海洋などの水資源、魚、森林、牧草地など個人や組織が共同で使用ないし管理する資源のことである」(岡部 2010a: 14 ページ)。

### 形容詞句による定義

第2の定義方法は、形容詞句によって定義するという方法である(図表4)。例えば「熱帯夜」を定義するには、「夜間の最低気温が25度C以上の」熱帯夜、と表現すればよい。すると「夜間の最低気温が25度C以上の」という形容詞句を付けることによって熱帯夜とはどんな夜かが明確にされるので、熱帯夜が定義できる。

もう一つの例を挙げたい。それは、日本の戦後復興期あるいは高度成長期において重要な役割を担った「産業政策」である。この場合、「政府が基幹産業ないし将来性が高いとされた産業を戦略的に育成しようとするいわゆる」産業政策、というかたちで産業政策にかかる形容詞句を付けることによって定義することができる。ただ、このように定義する場合、形容詞句が長くならざるを得ない難点がある。それを回避するのが望ましい場合

■例2: ガバナンス

ガバナンスとは、一般的にいえば何らかの権限あるいは合意によって一つの秩序ないしシステム作動の仕組みが作りだされている状態のことである。 [岡部 2001]

■例3: 共有資源 (通称 コモンズ)

共有資源(通称コモンズ)とは、川、湖、海洋などの水資源、魚、森林、牧草地など個人や組織が共同で使用ないし管理する資源のこと(であり)、…。 [岡部 2010a: 14ページ]

図表 3

(2) 形容詞句によって定義する方法

■例4: 産業政策

日本の戦後復興期あるいは高度成長期においては、政府が基幹産業ないし将来性が高いとされた産業を戦略的に育成しようとするいわゆる産業政策(が採られた。) [岡部 2010a: 9 ページ]

■例5: 熱帯夜

夜間の最低気温が25℃以上の熱帯夜(が10日も続いている。)

図表 4

**(3) カッコ内で定義する方法**

## ■例6: プラザ合意

1985年9月のプラザ合意(米国の貿易赤字を減らすため先進五カ国がドル高是正に向けて協調して外国為替市場介入を行うという合意。G5合意とも称される)はその典型的な歴史的事例である。 [岡部 2010b: 27ページ]

## ■例7: グローバリゼーション

グローバリゼーション(人間の各側面における活動が国境を越えて活発化すること) [岡部 2009: 3ページ]

図表 5

**ポイント2. 先行研究を批判的に検討するための独立した章を立てよ。**

- ・先行研究の批判的検討 (critical literature review) を含んでいないものは論文として失格。
- ・どんな研究であってもその位置づけがなされていることが不可欠。そのためにこれが必要。
- ・論文には標準的な構造があり、たいていの場合、論文の「序章」ないし「第1章」としてこれを論じる必要。なお、修士論文の場合、論文末尾の「謝辞」は最も重要な要素の一つ。

図表 6

には、同じことを一文で定義する方法（上記第1の方法）に変換すればよい。すなわち「産業政策とは、日本の戦後復興期あるいは高度成長期において政府が基幹産業ないし将来性が高いとされた産業を戦略的に育成しようとした政策のことである」となる。

**括弧内での定義**

第3の方法は、定義すべき用語のあとに括弧、すなわち（ ）を付け、括弧内で定義するという方法である（図表5）。

一例として、国際金融においてよく知られている1985年の「プラザ合意」を取り上げよう。この場合、プラザ合意という言葉のあとに（ ）を付け、その中に「米国の貿易赤字を減らすため先進5カ国がドル高是正に向けて協調して外為市場介入を行うという合意。G5合意とも称される」という文章を挿入すればよい（岡部 2010b: 27 ページ）。こうすれば、プラザ合意が明確に定義できる。このように括弧内で定義する方法は、定義すべき用語を含む文章の構造を明確に維持できる点（文章としては括弧部分を無視できるので文章の流れを乱さない点）が長所といえる。

いまひとつ別の例は、グローバリゼーションである。この場合、グローバリゼーションのあとに（ ）を付け、その中に「人間の各側面における活動が国境を越えて活発になること」と挿入すればよい（岡部 2009: 3 ページ）。

**(2) 先行研究を批判的に検討するための独立した章を立てよ**

第2のアドバイスは「先行研究を批判的に検討するための独立した章を立てよ」である（図表6）。

どんな研究であっても、その研究が従来の研究の流れのなかでどのように位置づけられるのかが明確に示されていることが基本的に重要である（Machi and McEvoy 2008）。学部生の卒業論文の場合にはそれが厳密に求められることがないかもしれないが、修士論文においては、その点についての明示的記述が含まれていることが不可欠の条件である<sup>(6)</sup>。厳しく言えば、修士論文においては、先行研究の批判的検討（critical literature review）が含まれていない場合には、論文として失格である。

それは、標準的に二つの記述が含まれる必要がある。第1は、当該研究に関連を持つそれまでの研究にはどのようなものがあるか、そしてそれらはどう評価されるか（それぞれの貢献度の大きさ、それらの研究に含まれる問題点、残された研究課題等）を記述することである。つまり、先行研究を幅広く展望（サーベイ）し、それらを批判的に評価して位置づけることである。第2は、そこで明らかになった問題点（各種概念、分析手法など）を当該研究ではどう対応して解決しようとしているのか（新しい概念ないしモデルの導入、より良い分析の手法ないしデータの活用など）を記述し、その論文がどの面で新たな貢献をする可能性がある

るかを示すことである。このため、研究論文には標準的な構造があり、たいていの場合、論文の「序章」ないし「第1章」においてこれらを論じるのが国際的に通用する論文の標準形式となっている<sup>(7)</sup>。

なお、先行研究を展望する場合、その主要なものを一覧表にして提示するのが一つの効果的な方法である。その表には、論文名、研究の特徴、主な論点などの項目を立て、各項目のポイントを簡潔に整理して示すのがよい。そうすれば、読者にとっても、また執筆者にとっても全体を見通しやすくなる。筆者の書籍からその一例を示したものが図表7である。

修士論文の場合、明確に上記の構成になっているならば、ほとんどの場合（それに続く論文本体を読まなくとも）全体として良い論文になっている、といっても差し支えないほどである。なぜなら、その場合には執筆者が研究および研究論文とは何かをしっかりと理解しているからである。

以上の点を具体的に理解していただくために、一例をあげたい。それは筆者が最近書いた論文の中で比較的堅固な構造を持った研究論文（岡部2010b）である。それは国際経済学に関するものであり、当該分野では古くから確立された命題である「マーシャル＝ラーナー条件」をより一般な場合に拡張して新しい条件式を提示したものであ

図表7 金融部門の深化と経済発展に関する先行研究—アドバイス2の例示—

先行研究	視 点	実証結果
Beck and Levine (2002a)	● 市場部門と銀行部門が経済発展に与える影響の異同	● 銀行部門、市場部門が共に深化することが経済発展において重要である。
Beck and Levine (2002b)	● 産業レベルにおける金融部門の深化と経済発展の関係	● 適切な法の執行がなされていれば金融部門の深化は経済発展において重要である。 ● 法制度が金融部門の発展において重要である。
Levine (2002)	● 金融制度と経済発展の関係	● 金融制度の違いは経済発展に影響を与えず、金融部門の全般的な深化こそが重要である。 ● 法制度が金融部門の深化において重要である。
鈴木 (2002)	● 金融制度と経済発展の関係	● 金融部門の全般的な深化が重要である。 ● 2つの金融制度のうちいずれかに特化することが重要である。
Demirgüç-Kunt, Laeven, and Levine (2003)	● 銀行規制、市場の諸制度が金融部門に与える影響	● 銀行規制は銀行の規模や金融仲介費用など様々な影響を与えるため、より広い視点で捉える必要がある。
Beck, Demirgüç-Kunt, and Levine (2004a)	● 法制度が企業の資金調達に与える影響	● 法制度の差異は、外部資金調達に直面した企業の行動に影響を与える。
Levine (2004)	● 金融制度と経済発展に関するサーベイ	● 銀行部門と市場部門は単体で存在するものではなく、相互に関係している。 ● 金融深化が経済発展において重要である。
Beck, Demirgüç-Kunt, Laeven, and Levine (2004)	● 金融深化の利益は企業規模によって異なるか	● 金融深化は、大企業よりも中小企業の発展により大きな影響を与える。
Beck, Demirgüç-Kunt, and Levine (2004b)	● 金融深化は所得の不等性を解消するか	● 金融深化により、平均所得は上昇するが、その上昇は富裕層よりも貧困層のほうが大きい。 ● このため金融深化は所得の不等性を解消する。
岡部・光安 (2005) [本章]	● 金融深化ならびにその追加的な深化が経済発展に与える影響	● 金融深化は経済発展において重要である。 ● 各国の銀行部門と市場部門の深化度合いによって発展させるべき部門が異なる。

(出所) 岡部光明 (2007) 『日本企業と M&A』188 ページ。

例：「一般化マーシャル＝ラーナー条件」の論文 [岡部 2010]

はじめに

1. マーシャル＝ラーナー条件の導出：二つの分析枠組み

2. 従来の研究の問題点：4項目

- ・当初の貿易収支状況に対する配慮欠如
- ・貿易収支の表示通貨に対する配慮欠如
- ・長期的効果と短期的効果の同時導出という視点の欠如
- ・為替相場変動に伴う輸出価格の交渉を無視

3. 一般化されたマーシャル＝ラーナー条件の導出とJカーブ効果の統合

4. 実証分析(1)：プラザ合意以降の大幅円高化と貿易収支

5. 実証分析(2)：為替相場変動の貿易収支調整効果

6. 若干の政策的含意

7. 結論

図表 8

る<sup>6)</sup>。内容はかなり専門的なので深入りせず、もっぱら論文の構造に着目してそれを紹介したい。

### 学術論文の望ましい構造：一例

その論文の章立ては図表 8 のようになっている。すなわち「はじめに」のあと、第 1 章で、マーシャル＝ラーナー条件を導出する場合には従来二つの分析枠組みが用いられたことを指摘している。それに続く第 2 章において、従来の研究を幅広く展望する（およそ 20 本の先行研究に言及する）とともに、それらが持つ問題点は 4 つのタイプに整理できることを記述している。

すなわち、(1) マーシャル＝ラーナー条件を導出する場合、当初の貿易収支が赤字であるか黒字であるかによって結果は異なるものとなる（にもかかわらず従来はそれが考慮されていない）、(2) 貿易収支をドル表示するか円表示するかで結論は異なるものとなる（にもかかわらず従来はその区別がなされていない）、(3) 長期的効果と短期的効果は異なったものとなることが知られているが従来はそれが個別の現象として理解されている（一つの統一的分析枠組みから導出されるべきであるがそうされていない）、(4) 為替相場変動に伴って輸出業者は輸出価格を変化させる交渉を行うがその側面が考慮されていない、この 4 つである。

そして第 3 章では、これら 4 つの問題点を克服するための一つの枠組みを提示するとともに詳細な分析を行い、従来のマーシャル＝ラーナー条件を一つの特例ケースとして含む一般化されたマー

### ポイント3. 読まれるのは概要 (Abstract) だけであると心得よ。

- ・ほとんどの論文の本文は読まれない。また読む必要もない！
- ・概要の完成度と本文の完成度は概して比例する。
- ・論文は概要で勝負するもの。良い概要の作成に全力を傾注すべし。

図表 9

シャル＝ラーナー条件を導出している。続く第 4 章および第 5 章では、その結果が統計的実証分析によって支持されることを示し、第 6 章では本稿の分析の政策的含意 (policy implication) を述べている。

つまりこの論文は、(1) 研究課題の明示、(2) 先行研究の批判的検討と問題点指摘、(3) その問題点に関する新しい対応方法の提示と展開（理論分析）、(4) その結果の実証的検証、(5) 分析結果が持つ政策的含意、を順次記述している。したがって、この論文は、社会科学の論文として最も標準的な構造になっている（国際標準の様式になっている）と筆者は考えている。修士論文を執筆する場合も、学生諸君は基本的にこのような構造を持つ論文を書いてほしいと期待している。ただし、このうち (2) は必須であるが、それ以外の項目をどの程度含むかどうかは場合によって異なってくる。

### (3) 読まれるのは「概要 (abstract)」だけであると心得よ

第 3 のアドバイスは「読まれるのは概要 (abstract) だけであると心得よ」である (図表 9)。

極端な言い方をすると、ほとんどの論文の本文自体は読まれないものであり、また読む必要もない！ 少なくとも筆者はそう考えている。

研究活動においては、誰でも各種の書物や論文を読むという作業に多大の時間とエネルギーを投入することになる。その場合、自分の研究に直接

関係する重要な論文は全文を精読する必要がある（しかも複数回読む必要がある場合も少なくない）。しかし、それ以外の論文の場合、その読み込みにどの程度の時間と注意力を注ぐかは全くケースバイケースであり、非常に大きな差がでてくる。人間に与えられた時間は限界があることを意識する必要がある。つまり、論文の表題だけをみてそのまま見過ごせる論文がある一方、少なくとも概要や末尾の参考文献リストを見る必要がある論文（しかし本文を読む必要はない論文）があり、また本文の一部をていねいに読む必要がある論文もある。

実は、目にする多くの論文がこれらのどの分類に入るかを見きわめる力こそ研究者に要請される能力のひとつであり、修士課程はその鍛錬をする過程ということもできる。

では、提出された修士論文を評価する教員は、それをどのように読むのだろうか。むろん、建前としては論文全部を精読して評価することになっている。しかし、これは修士論文を一言一句読むことが求められていることを意味しない。最も大切なのは、論文としての体裁が整っているかどうかのほか、論文内容が修士課程修了にふさわしいものになっているかどうかの判断を下すことである。このためには、当該研究の内容の核心を的確かつ深く理解することが最も大切である。そのために最も有効かつ効率的な方法は、論文概要（abstract）を先ず読み、そこで言及されている重要部分が本文で説得的に展開されているかどうかを確認することである（これが筆者の修士論文の読み方である）。

したがって、修士論文の核心が概要に適切に記述されていない論文は、不利になる可能性がないとはいえない。しかし、筆者の長年の経験によれば、概要の完成度と本文（論文内容）の完成度は概して比例するものであり、良い論文にはたいがい良い概要が付されているのが通例である。逆に概要にパンチ力がない論文は、本文も読み応えがない場合が多い。怖いことかも知れないが、論文は概要で勝負するもの、という見方も成立するのではなかろうか。したがって、修士論文を作成す

る場合、学生は良い概要の作成に全力を傾注すべきである。

修士論文の場合、大学院によっては概要の様式が規定されているケースがある一方、それが明示的に規定されていないケースもある<sup>9)</sup>。前者の場合には、その規定（字数）内に論文のエッセンスを全部盛り込む必要があるため、概要の構造（後述）に十分配慮するとともに、一言一句磨き抜かれた文章で綴るべきである。そして後者の場合には、自発的に A4 用紙 1 枚程度の概要を論文冒頭に添付すべきである。

### 概要の構造：一例

では、良い概要とするには、どのようなことをそこに盛り込めばよいか。それは (1) 問題の位置づけ、(2) 先行研究が抱える問題点の指摘、(3) それを克服するための当該論文の分析手法、(4) 主な結論、この 4 点であると筆者は考える(図表 10)。

この 4 つを記載した概要はどのようなものかを具体的に示すため、前述した論文(岡部 2010b)を再び取り上げることにしよう(図表 11)。

まず、概要の冒頭では「為替相場の変動が貿易収支を初期の方向に変動させるには、輸出入の価格弾力性が一定の条件(マーシャル＝ラーナー条件)を満たす必要があることが従来から知られている。」と記述している。やや専門的な内容になっているが、国際経済学の領域(中級以上)になじみのある研究者ならば、この内容は直ちに理解できるはずである。例えば、円相場が円高になると日本の貿易収支の黒字が減る、というのが普通の状況だが、それが実現するには、輸出入額がどの程度、輸出入価格の変化に反応するかに依存する。この視点が必要になることは直感的にも明らかである。例えば、仮に円高になっても輸出額と輸入額が全然変わらないとすれば、その差額である貿易収支(赤字額ないし黒字額)は変わらないことを考えればこれは明らかである。そこで問題は、円高になった場合、輸出入額が「どの程度」変化すれば、黒字が減ることになるか、という「程度問題」になる。このように輸出入が変化する程度(度合い)についての条件が 70~80 年前から



<p>■良い概要は次の要素を含む:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・問題の位置づけ</li> <li>・先行研究の問題点指摘</li> <li>・当該論文の分析手法</li> <li>・主な結論</li> </ul> <p>■例:「マーシャル＝ラーナー条件の一般化について」 [岡部 2010b] . . . .</p>
--

図表 10

<p>【概要】</p> <p>為替相場の変動が貿易収支を所期の方向に変化させるには、輸出入の価格弾力性が一定の条件(マーシャル＝ラーナー条件)を満たす必要があることが従来から知られている。しかし、その条件は比較的強い前提があつてはじめて適用可能なものであるにもかかわらず、従来の研究や政策議論ではその点に十分な配慮がなされていない。本稿では、より一般的な環境を前提にしたモデルを設定してその問題を分析した。その結果(一)従来のマーシャル＝ラーナー条件を一つの特例ケースとして含む一般化されたマーシャル＝ラーナー条件を理論的に導出できること、(二)短期的には長期的効果と逆の効果を持つ現象(いわゆるJ-カーブ効果)もこのモデルによって導出できること、を示した。そしてそれらの結果は(三)日本のかつての円高局面の現実を整合的に説明できること、(四)政策的にも意義深いこと(国際収支は自国通貨建てで表示するのが適当である)、などを主張した。</p>
---

図表 11

「マーシャル＝ラーナーの条件」として知られている重要な命題である。これが、この論文で扱う問題であり、それを冒頭の文章で設定しているわけである。

次の2番目の文章では「しかし、その条件は比較的強い前提があつてはじめて適用可能なものであるにもかかわらず、従来の研究や政策議論ではその点に十分な配慮がなされていない。」と述べている。これが「先行研究の問題点の指摘」に該当する。そして「本稿では、より一般的な環境を前提にしたモデルを設定してその問題を分析した。」と述べている。これは、上記4つの問題点を克服するため本稿ではひとつの一般的なモデルを作って分析したことを述べたものであり、「本稿の分析手法」の紹介である。

そして最後に論文の「結論」を箇条書きしている。すなわち「その結果 (1) 従来のマーシャル＝ラーナー条件を一つの特例ケースとして含む一般化されたマーシャル＝ラーナー条件を理論的に導出できること、(2) 短期的には長期的効果と逆の効果を持つ現象(いわゆるJ-カーブ効果)もこのモデルによって導出できること、を示した。」と二つの結論を述べている。そして文章を改め「そしてそれらの結果は(3) 日本のかつての円高局面の現実を整合的に説明できること、(4) 政策的にも意義深いこと(国際収支は自国通貨建てで表示するのが適当である)、などを主張した。」と結んでいる。

これら4つのうち、(1)と(2)は理論分析の結

果であり、(3)はその結果が実証分析によって支持されることを述べている。そして(4)は、これらから導かれる政策的含意の記述である。(1)と

(2)は、それ以外の主張と性格を異にするのでここでは文章を分けているが、(1)～(4)をすべて(途中で「。」をいれず「,」でつなぐかたちの)箇条書きにしても差し支えなからう。いずれの場合でも、主要な結論は、このように番号をつけた箇条書きによって示すのが最も望ましい(読者にとって理解し易い)と筆者は考えている。なお、上記のうち(4)の論点は、日本の国際収支の表示通貨を従来のドル建てから円建てに変更する根拠を現に提供することになった<sup>(10)</sup>。

#### (4) 最終提出論文は別途自費で黒表紙製本して保存せよ

第4のアドバイスは「最終提出論文は別途自費で黒表紙製本して保存せよ」である(図表12)。

修士論文の場合、大学に提出する論文は通常、紙表紙で綴り込んだものを提出するのが一般的である。それは返却されず、大学の所有物となり図書館等で保管される場合が多い<sup>(11)</sup>。修士論文の可否審査にとっては、確かにそれだけで十分である。しかし、修士課程を修了する学生は、提出論文とは別に1冊、自費で標準的な製本(黒表紙付き)をして保存するべきである。なぜなら、修士論文を書く機会は、たいていの場合、一生に一度であり、それはプロフェッショナル教育の第一歩の区切りを意味する成果(作品)であり、自分できち

**ポイント4. 最終提出論文は自費で黒表紙製本せよ。**

- ・修士論文の場合、大学に提出する論文は通常、紙表紙の綴り込み形式。
- ・しかし、自分の作品は自分で費用をかけて製本して保存するべき。

図表 12



図表 13

んと残しておくべきだからである。後日それが役に立つかことがあるかどうかはその時点ではわからないが、何らかのかたちで思わぬ役に立つ場合がある可能性がある。そして何よりも、それは長い人生航路における一つの記念碑としての意味がある。

なお、修士論文だけでなく、卒業論文や博士論文などを製本する専門業者は少なくない。また料金もさして高価ではないので、修士論文はぜひ製本のうえ保存しておきたい<sup>(12)</sup>。ちなみに、筆者が担当する学部ゼミナールにおいても、履修者の卒業論文をそのように製本して保存することを奨励している。図表 13 の 2 冊は、論文としての質と量の両面でとくに優れた卒業論文の製本例である。この 2 冊を上からみた場合が図表 14 の上方の二つである。三つ目（最も下方の 1 冊）は、実は比較的ページ数の少ない修士論文（修士論文であるが

学部生の卒業論文よりもはるかにページ数が少ない例）である。ページ数が少ないからうまく製本してもらえるかどうかという心配は不要である。そのような場合でも、この図にあるように「上げ底」できちんと製本してくれる。何ごとも、プロはプロの技量を持っているものである。

**(5) 論文のさわり部分を公刊せよ**

最後、第 5 のアドバイスは「論文のさわり部分を公刊せよ」である（図表 15）。

博士論文の場合は、それを易しく書き直したうえで 1 冊の書籍として刊行する例が少なくない。学術書の序文をみると「この本は著者の博士論文のエッセンスを一般向けに書きなおしたものである」という記述をよく見かけるものである。修士論文でも、例外的にはそうしたケースがある。例えば、かつて慶應義塾大学大学院 政策・メディア



図表 14

**ポイント5. 論文のさわり部分を公刊せよ。**

- ・博士論文を書籍として刊行する例は少なくないが、**修士論文**でもその一部(さわり)を論文として専門誌に投稿し、刊行すべき。

留意点 1: 修論完成後、時間を経ずにさわり部分を投稿論文として仕立てる。

留意点 2: 論文の著者名は、院生の単名、あるいは指導教員と共同執筆のかたち。第 1 著者の論文は業績にカウントされるが、第 2 著者の論文はほとんどの場合、業績にならない。したがって、院生が第 1 著者になることが大切。

「査読」を経て刊行されれば業績の一つになる。

図表 15

研究科の修士課程を修了された池田信夫氏は、その修士論文を『情報通信革命と日本企業』（NTT出版）として1997年に出版された。しかし、これは例外であり、一般的には修士論文をほぼそのまま著書として刊行することはなかなか望めないし、また望む必要もない。

ただ、修士論文の場合でも、その全部でなくとも論文の核心部分（いわば論文のさわり部分）を一つの論文に仕立て上げ、専門誌に投稿して刊行することは可能である。しかも、その事例は少なくない。修士課程を修了する学生諸君は、ぜひこれを狙って欲しい。

修士論文の場合、その提出とその後の日取りパターンは次のようなものであろう。すなわち、まず論文を（多くの場合1月上旬に）提出する、そのあとは論文内容に関する口述最終試験（通常は1月下旬ないし2月上旬）があり、それが済めば3月の修了式を待てば良い、ということになる。そして幸い修士課程を修了すれば、4月以降は博士後期課程に進学する、あるいはプロフェッショナルとして国内外の実世界で活躍する、という場合が大半であろう。つまり、4月になると、当然のことながら自ら入っていく新しい世界に関心が集中し、修士課程で学修したことや修士論文は過去の話となり関心が薄れてしまう。このため、筆者が強調したいのは、修士論文提出後の2月および3月にもうひと頑張りし、修士論文の核心部分を一つの論文（修士論文を大きく刈り込んで比較的短くした投稿用の論文）にしてほしい、ということである。筆者から修士課程2年生に対する最大のメッセージは、実はこれである。つまり、修士論文完成後、時間を経ないうちに一気に呵成に論文の核心部分を投稿論文として仕立てるべきこと（鉄は熱いうちに打て）、これが5つ目のアドバイスのうちの第1の留意点である。

第2の留意点は、そうした論文の著者名についてである。修士論文を刈り込んで投稿用の短い論文にする場合、その著者名は次の二つのうちのいずれかにすべきである。一つは、院生の単名論文にすることである。例えば、高木信太郎（大学院修了者）著「日本の鉄道産業の輸出拡大に向けた

競争条件の整備—総合弁証法による検討—」というかたちの論文にすることである。もう一つは、指導教員（例えば渡邊頼純教授）と大学院修了者（高木氏）の共同執筆の論文にすることである。

前者の単著論文の場合は当然、執筆者（高木氏）本人の業績になるので問題はない。ところが、後者の共同執筆論文にする場合には、十分注意が必要である。なぜなら（学問分野により異なり、また国内外の慣例も異なる場合があるものの）共同執筆論文は、多くの場合、第1著者にとってだけ正当な業績（単著論文の場合とほぼ同様の業績）として評価されるからである。つまり、第2著者として氏名を連ねていたとしても、その論文は第2著者の大きな業績として評価されることはあまりないからである<sup>(13)</sup>。したがって、修士論文の短縮版を専門誌に投稿する場合、院生が第1著者になることがきわめて大切である。また、修士論文は、たいていの場合、修士課程学生の単著論文、あるいは修士課程学生が筆頭著者になりうる論文であろう。このため、共同著者名を決めるうえでは、この点に十分注意すべきである（例えば著者名を単純にあいうえお順に並べるといったことは回避すべきである）。こうして投稿した論文が「査読」を経て専門誌に掲載されれば、修士課程修了者の本格的な業績の一つになる。

#### 修士論文の刊行：4つの例

修士論文は、正真正銘の研究論文として専門雑誌に刊行できるものが多い。そのような刊行例のうち比較的身近なもの（大学院生が現に投稿できそうな雑誌）を以下、4つ示すことにする（図表16）。

一つ目の例は、土屋貴裕さんという方の「中国の軍事支出のトレンド推計—状態空間モデルによる接近—」という論文である。これは今春刊行された『Keio SFC Journal』3月号に掲載されたものである。この論文の第1ページ下方を見ると「本論文は、一橋大学大学院経済学研究科における修士論文の一部を大幅に加筆・修正したものである。（以下略）」と記載されている。これによって、修士論文の核になっている部分を単著論文としたも

■例1  
土屋貴裕「中国の軍事支出のトレンド推計—状態空間モデルによる接近—」*Keio SFC Journal*, 10(2)、2011年3月。

注書き:「本論文は、一橋大学大学院経済学研究科における修士論文の一部を大幅に加筆・修正したものである。(以下略)」

■例2  
高阪勇毅「ETF導入は日経225現先間の裁定取引を活発にさせたか」『金融経済研究』30号、2010年4月。

注書き:「本稿は筆者が大阪大学大学院在籍時の修士論文がもっている。(以下略)」

図表 16

■例3  
山本 聡・白井早由里(2004)「経済安定の基盤としての地方自治体の財源問題- 地方交付税のフライペーパー効果とその実証分析 -」、慶應義塾大学21世紀COEプログラム、総合政策学ワーキングペーパー33号。  
<http://coe21-policy.sfc.keio.ac.jp/ja/wp/list04.html>

注書き:「本稿は第一著者(山本)の2003年度修士論文をもとに加筆・修正を加えたものである。」

■例4  
佐藤淳史「ARM社の競争力分析」湘南藤沢学会ディスカッションペーパー(DP)、2009年5号。  
[http://gakai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_index.html](http://gakai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_index.html)

これは修士論文の一部。このDPシリーズは、指導教員が認めた論文は院生(修士課程)でも投稿可能。

図表 17

のであることがわかる。

二つ目は、日本金融学会の研究論文誌『金融経済研究』に掲載された「ETF導入は日経225現先間の裁定取引を活発にさせたか」という表題を持つ論文である。この論文の注書きとして「本稿は筆者が大阪大学大学院在籍時の修士論文がもっている。(以下略)」という記述がある。したがって、この論文も著者の修士論文を基礎とした単著論文であることがわかる。

三つ目は、SFC大学院に直接関係する論文「経済安定の基盤としての地方自治体の財源問題—地方交付税のフライペーパー効果とその実証分析—」である(図表17)。著者は、かつて政策・メディア研究科の修士課程に在籍していた山本聡さんとSFC白井早由里教授(現日本銀行政策委員会審議委員)である。ここで重要なのは、大学院生の山本聡さんが筆頭著者になっている点であり、それが大きな意味を持つことは前に述べたとおりである。そしてこの論文の注書きとして「本稿は第一著者(山本)の2003年度修士論文をもとに加筆・修正を加えたものである。」と明記されている。

ただ、この論文は、ワーキング・ペーパー(最終刊行に先立つ検討論文)シリーズに採録された論文であり、専門研究誌に査読を経て掲載された最終刊行論文でない点が上記二つのケースと異なっている。その点、査読を経て刊行された最終論文よりも業績として評価される度合いは確かに低いものに止まる。しかし、ワーキング・ペーパー(ディスカッション・ペーパーとも称される)に

採録されることは、研究の中間的な成果ということができるよう、それをそのまま(あるいは改訂したうえで)本格的な査読付き専門誌(refereed journal)に投稿することもできるので、修士論文を比較的簡単ながら上手に残す方法といえる。

なお、「総合政策学ワーキング・ペーパー」は、慶應義塾大学21世紀COEプログラム(2003年から5年間に亘る文部科学省支援研究プログラム)の研究成果を収録するシリーズであり、筆者もその研究メンバーとしてだけでなく、ワーキング・ペーパーの編集委員として深く関与していた経緯がある。このワーキング・ペーパー・シリーズには合計150編もの論文が採録されており、研究期間が終了した現在でも全ての論文がインターネット上で簡単に閲覧ないしダウンロードできる<sup>(14)</sup>。

四つ目は、佐藤淳史さんという方の「ARM社の競争力分析」という論文である。これは修士論文の一部であり、三つ目の例と同様、湘南藤沢学会の「ディスカッション・ペーパー」シリーズに採録され公刊された論文である。このシリーズには、SFC教員による論文だけでなく、大学院生(修士課程)による論文でもSFC指導教員が認めた論文ならば投稿可能である。「総合政策学ワーキング・ペーパー」シリーズへの新規採録が閉鎖された現在、それに代わるものとして「湘南藤沢学会ディスカッション・ペーパー」シリーズ<sup>(15)</sup>は大学院生にとって便利かつ貴重な投稿先である。SFCの大学院生はこの制度を精々活用すべきである。

### 修士課程1年生でもできること（やるべきこと）

修士課程1年生は、このディスカッション・ペーパー・シリーズに論文を投稿することを考えるのはまだ時期尚早と考えるかも知れない。しかし、実はそうでない。修士論文の序章あるいは第1章では、既に述べたとおり先行研究の批判的検討を扱う必要がある。したがって、それは論文の後半部分（それは多少とも新規性のある研究でなくてはならないので修士課程2年次に執筆することになる）と切り離して1年次に書くことができる。1年次生には、その秋学期が終わった段階でこのような論文を一つ確実に完成させ、それをディスカッション・ペーパーとして残すことを強く勧めたい。

このディスカッション・ペーパーは、紙に印刷したものとして刊行されることはないが、投稿後に比較的簡単な形式審査を経てウェブ上（湘南藤沢学会のホームページ上）に公開され、誰でも論文全文をPDF形式でダウンロードすることができるかたちになる。これは強力な公開手段である。検索手段であるGoogleあるいはGoogle Scholarにおいてこの論文のキーワードを入れて検索すると、多くの関連サイトとともにこの論文が引っかかってくる。つまり、公開されれば、そのテーマで情報を探している世界の研究者に直ちにその論文を見てもらえるわけである。修士論文のレベルのものならば、たいていの場合、こうした対応（投稿）が可能である。それを行わないのは院生あるいは教員（ないしその両方）の怠慢ではないか、と筆者は考えている。

### 3. 結論：合計8つの実践的提案

以上、良い修士論文を書きそれを上手に残す方法として述べたことを要約すると次の5つである：(1) 基幹用語を適切に定義せよ。(2) 先行研究を批判的に検討するための独立した章を立てよ。(3) 読まれるのは概要（abstract）だけであると心得よ。(4) 最終提出論文は自費で黒表紙製本せよ。(5) 論文のさわり部分を公刊せよ。

この5つ以外にも留意すべき点は数多くある。

それらは単に修士論文に限らず卒業論文や博士論文の場合においても共通する留意点である。ここでは、そのうち3つを指摘し、上記5つのアドバイスに加え、合計8つの実践的提案として本稿を結んでおくこととしたい。

一つ目は「論文には熟慮したタイトル（表題）をつけよ」である（岡部 2011a：173 ページ）。表題は、いわば論文の最も短い要約であり、論文の顔ということもできる。したがって、論文のタイトルは、問題意識（テーマ）だけでなく、分析手法や結論をも示唆するものになっていることが望ましい。表題の字数は自ずと非常に限られているので、こうした情報をできるだけ多く盛り込むように工夫することが大切である。

二つ目は「明快さ（clarity）、正確さ（precision）、そして効率性（efficiency）を満たす図表を工夫して作成し、それを本文に挿入せよ」である。よく工夫された図（概念や因果関係を図式化したもの）あるいは表（統計データ）が提示されれば、論点や主張が一目瞭然となる場合が多い（岡部 2006：206 ページ）。磨き抜かれた図表は本文と不可分一体のものである。望ましい図表の例だけでなく、望ましくない図表の例も数多く掲載して要点を解説した世界的に活用されている書物としてTuft（2001）がある。論文を執筆する場合には、論文の書き方に関する手引き書に加えてぜひこの書物も参照することを薦めたい。ちなみに、筆者が論文や書籍を執筆する場合、そこに含まれる図表は常に上記の3原則（clarity, precision, efficiency）に合致するように細心の配慮をしたものにするように心がけている（岡部 1999：2 ページ脚注3）。

三つ目は「スクリーンを用いて論文発表（PPTプレゼンテーション）を行う場合には、画面の作り方や話し方はすべて聴衆の立場に立って考えよ」である。これは具体的に10項目の実践的提案として示すことができるが、それは別途詳細に解説した（岡部 2011b）ので、ここでは立ち入らない。

以上を要約すれば、論文の構造にはほとんどの学問分野に共通する「型」があり、それに合致した論文を書くべきである、ということになる（岡

部 2011b : 173-177 ページ)。とくに修士課程の学生は、修士論文の執筆を通してそうした標準的様式をしっかりと身につけることが肝要である。極論すれば、修士課程を修了するとは、こうした形式の論文が自然に書ける力量を習得することである、と言っても良いかも知れない。

何ごとにつけ「型」は、長年月を経て磨かれ洗練されたいわば知恵の結晶である。こうした型に従うことによって物事がよく整理でき、無駄がなくなり、そして本質的なことを効果的に伝達することができるようになる。茶道、柔道、あるいは各種の儀式を想起すればこのことが理解できるだろう。また型に従って執筆するならば、どのような型によるべきかに悩む必要がなくなるので、より本質的なことがら（内容）に集中することができる。

俳句は 5—7—5 の 17 音による定型詩であるが、5—7—5 以外の 17 音の組み合わせを考える必要がないので、詠う内容をこの型に入れることだけに集中すればよいわけである。また作曲家モーツァルトの交響曲や協奏曲の場合、第 1 楽章は軽快なアレグロによるソナタ形式、第 2 楽章はアンダンテの緩徐楽章、そして第 3 楽章は再び軽快なソナタ形式という基本型がある。つまりモーツァルトは、曲毎にどのような形式にするかを一々考える必要がなく、曲想に集中することができたわけである。

修士課程の学生は、論文における国際標準の型がどのようなものであるかを理解するとともに、そうした型に従って各自の研究成果を論文として取りまとめ、そしてそれを上手に残されるよう筆者は期待している。

#### 注

\* 本稿は、明治学院大学大学院国際学研究科における 2011 年度春学期講義「国際学基礎演習」で提示した内容および慶應義塾大学大学院セミナー（2011 年 9 月 28 日）で発表した内容を基礎として執筆したものである。各種のご示唆をくださった国際学研究科の大木昌教授、慶應義塾大学大学院セミナーにおいてコメントと督励をたまわった渡邊頼純教授、香川敏幸名誉

教授、小林良樹教授に感謝したい。

- (1) 川崎（2010）では、卒業論文、修士論文、博士論文に区分して比較的ていねいな解説がなされており、この点類書の中では珍しい。
- (2) 筆者がこれまで大学院レベルで指導にかかわったのは、米国ペンシルバニア大学ウォートンスクール大学院、米国プリンストン大学ウッドローウィルソンスクール国際問題公共政策大学院、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、明治学院大学大学院 国際学研究科である。
- (3) 岡部（2006：第 4 章 8 節）、岡部（2011a：第 3 部 3 章および 4 章）を参照されたい。
- (4) これらについては、例えば、古典的名著とされる木下（1981）のほか、木下（1994）、高橋（2004）、Booth, Colomb, and Williams（2010）などがある。
- (5) 研究の取り組み姿勢については、岡部（2009b：第 5 部 2 章）、岡部（2011a：第 1 部 1 章および 2 章）を参照されたい。大学院における研究や論文執筆などに関する多面的かつ具体的なアドバイスは、Phillips and Pugh（2010）、Bolker and Hartman（1998）を参照。研究を上手に進める一つの具体的方法として、インフォーマルな研究会（ブラウンバッグ・ランチタイム・セミナー）がある。このセミナー性格や活用方法については、香川・岡部・伊藤（2006）、岡部（2011：256-261 ページ）を参照されたい。
- (6) 修士論文の中間発表会においては、研究発表のおよそ半数がこれをはっきり意識していないとの印象を筆者は持っている。すなわち「自分はこういうことを思いついて調査しました。そしてそれをまとめました。」という発表が残念ながら少なくない。
- (7) 論文の形式に関していえば、修士論文の場合、論文の本文とは関係ないが、論文末尾にていねいな「謝辞」を付けることも忘れるべきでない一つ重要点である。
- (8) この論文は日本経済学会（2011 年 5 月）で発表する機会を得た。その際に指定討論者の役割を引き受けて下さった若杉隆平氏（京都大学教授）から「この論文の貢献は、既存命題を一般性のある命題に拡張したこと（論文中の表 1）、そしてブラザ合意以降の貿易収支均衡の動態的变化に一つの解釈を与えたこと、にある」との評価をいただいた。
- (9) 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科の修士論文の場合「論文要旨は A4 判 1 ページにまとめ、論文の主要な内容にかかわるキーワード 5 つ程度を下部に別記してください」と規定されている（「大学院ガイド 2011」49 ページ）。一方、明治学院大学大学院 国際学研究科の場合、博士論文については論文要旨の書式（文字数）規定があるが、修士論文については「論文要旨は不要」である（「明治学院大学大学院要覧 2011」9 ページ）。なお、筆者はそれを必須にすべきだと考えている。
- (10) 1980 年代までの日本では、国際収支はすべてドル建てで公表されていた。しかし、ドル表示の場合は（こ

の論文で指摘したように) 問題が含まれるため、やがて(1987年7月以降)ドル表示と円表示が併記されるようになり、その後(1996年3月以降)は円表示に一本化(ドル建て表示が廃止)されて現在に至っている。

- (11) 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科の場合、学生から提出された紙表紙の綴り込みは、使い勝手を良くするとともに頻繁な使用に耐えるようにするため大学が黒表紙製本し、メディアセンター(図書館)2階の博士論文・修士論文専用棚に配架して、一般の閲覧に供している。明治学院大学大学院 国際学研究科の場合、学生から提出された紙表紙の綴り込みは、同様に大学が黒表紙製本したうえで保管している(大学院在学生在が希望すれば閲覧できる)。
- (12) 慶應大学在籍者の場合、筆者や筆者のゼミナール学生がこれまでに多くの製本を依頼してきた次の業者が推奨できる(筆者が紹介コミッションをもらっているわけではない!): 「(株)エイト通商」。東京都港区三田4-1-35(慶應大学正門前)。http://www.printshopeight.com/。標準的には約1週間で製本が完成する(1冊5000円前後)。
- (13) 例えば、慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科の場合、博士学位授与の要件の一つとして「認知された学会論文誌において、単記あるいは筆頭著者として、レフリー付きの原著論文が2編以上採録、印刷中または採録許可であること」(下線は引用者による)が規定されており(「大学院ガイド2011」59ページ)、筆頭著者でない論文はさして意味を持たない扱いがなされる。また、研究者として就職活動をする場合にも、業績にカウントされるのは、通常は筆頭著者となっている論文だけである(第2著者となっている論文は参考論文として扱われるにすぎない)。
- (14) <http://coe21-policy.sfc.keio.ac.jp/ja/wp/list04.html>。
- (15) [http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_index.html](http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_index.html)。

#### [参考文献]

- 岡部光明(1999)『現代金融の基礎理論—資金仲介・決済・市場情報—』日本評論社。
- 岡部光明(2001)「多層化する現代のガバナンス—三つの特徴—」, 慶應義塾大学『Keio SFC Review』第11号, 11月。
- 岡部光明(2006)『私の大学教育論—慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでの実践—』慶應義塾大学出版会。
- 岡部光明(2007)『日本企業とM&A』東洋経済新報社。
- 岡部光明(2009a)「国際学の発展—学際研究の悩みと強み—」, 明治学院大学『国際学研究』36号。[慶應義塾大学湘南藤沢学会ディスカッションペーパー-SFC-DP2009-003。<[http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_list2009.html](http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2009.html)>]
- 岡部光明(2009b)『大学生へのメッセージ—遠く望んで道を拓こう—』(日本図書館協会選定図書) 慶應義塾大学出版会。
- 岡部光明(2010a)「経済政策の目標と運営についての再検討—二分法を超えて(序説)—」, 明治学院大学『国際学研究』39号。[慶應義塾大学湘南藤沢学会ディスカッションペーパー-SFC-DP2010-002。<[http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_list2010.html](http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2010.html)>]
- 岡部光明(2010b)「為替相場の変動と貿易収支—マーシャル＝ラーナー条件の一般化とJ-カーブ効果の統合—」, 明治学院大学『国際学研究』39号。『大学院生へのメッセージ—未来創造への挑戦—』2部2章, 慶應義塾大学出版会, に採録。[慶應義塾大学湘南藤沢学会ディスカッションペーパー SFC-DP2010-001。<[http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_list2010.html](http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2010.html)>]
- 岡部光明(2011a)『大学院生へのメッセージ—未来創造への挑戦—』慶應義塾大学出版会。
- 岡部光明(2011b)「効果的なパワーポイント・プレゼンテーション—理論的基礎と実践的提案—」, 慶應義塾大学湘南藤沢学会ディスカッションペーパー SFC-DP2011-001年。<[http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp\\_index.html](http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_index.html)> [明治学院大学『国際学研究』41号, 2012年3月]
- 香川敏幸・岡部光明・伊藤裕一(2006)「政策系ブラウンバッグランチセミナー研究発表の記録(2002年度秋学期~2006年度春学期)」慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科。
- 川崎剛(2010)『社会科学系のための優秀論文作成術』勁草書房。
- 木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書。
- 木下是雄(1994)『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫, 筑摩書房。
- 高橋昭男(2004)『日本語テクニカルライティング』岩波書店。
- Bolker, Joan, and Victoria Hartman (1998) *Writing Your Dissertation in Fifteen Minutes a Day: A Guide to Starting, Revising, and Finishing Your Doctoral Thesis*, Owl Books.
- Booth, Wayne C., Gregory G. Colomb, and Joseph M. Williams (2008) *The Craft of Research*, third edition, University of Chicago Press.
- Machi, Lawrence A., and Brenda T. McEvoy (2008) *The Literature Review: Six Steps to Success*, Corwin Press.
- Phillips, Estelle, and Derek S. Pugh (2010) *How to Get a PhD: A Handbook for Students and Their Supervisors*, 5th edition, Open University Press.
- Roberts, Carol M. (2010) *The Dissertation Journey: A Practical and Comprehensive Guide to Planning, Writing, and Defending Your Dissertation*, second Edition, Corwin Press.
- Tufte, Edward R. (2001) *The Visual Display of Quantitative Information*, second edition, Graphics Press.